

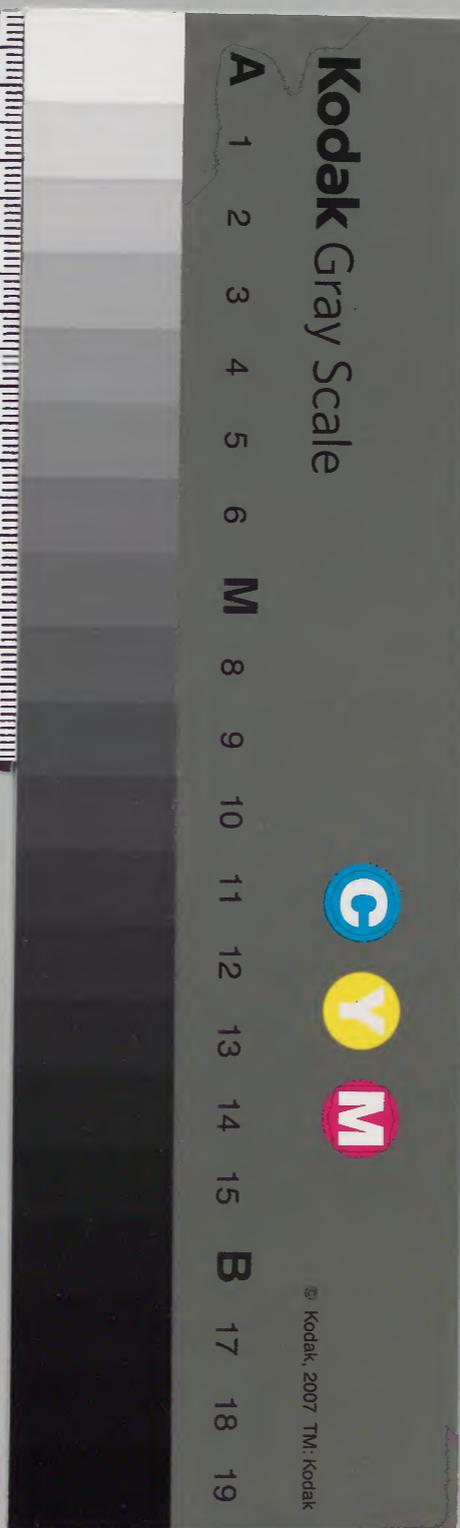
南亭餘韻

三

和書門			
二	七	九	八
一	八	一	號
五	四	七	函
冊	架	冊	架

內閣文庫			
二	七	九	八
一	八	一	號
五	四	七	函
冊	架	冊	架

內閣文庫	
番號	和 27981
冊數	5 (3)
函號	190 224



南亭餘韻

三

南亭餘韻卷之三

南亭餘韻卷之三

明治十三年購求

長壽篇

寛政九年の春勝興君印名例印性年印能退祝



先皇の御病御承候に
乃西の候に之らおぬに七十日凡西の病に
中少大御様小は
此の御病に
西一已乃西候に
是れ大候に
外威内傷乃二途

云はけ事と海にうつら平小して枕をさるふきと跡まゆゆと
生えたと時の幸相中々からかぬのゆわくふらさる丁々
君の所戒をさるふらかすのさるふら長一ふらぬら
ふらぬらふらふらふらふらふらふらふらふらふらふら
酒宴小長一ふらふらふらふらふらふらふらふらふら
ふらふらふらふらふらふらふらふらふらふらふらふら
例にそ君の契丹西夏つてはたふらふらふらふらふら
未のふらふらふらふらふらふらふらふらふらふらふら
ふらふらふらふらふらふらふらふらふらふらふらふら
ふらふらふらふらふらふらふらふらふらふらふらふら
ふらふらふらふらふらふらふらふらふらふらふらふら

馬後言ふ拙き筆をさるふらふらふらふらふらふらふら
一冊子所著是ふらふらふらふらふらふらふらふら

大儉差略

寛政九年中三ヶ年大儉は
信むらふらふらふら

一 僕約に輒く成易らふ物ふ力とさるふらふらふらふら
つ成方とさるふらふらふらふらふらふらふらふらふら
九事小取をねらふらふらふらふらふらふらふらふら
ふらふらふらふらふらふらふらふらふらふらふらふら
らふらふらふらふらふらふらふらふらふらふらふら
らふらふらふらふらふらふらふらふらふらふらふら

一 多治のり川流に薄盤小長柄の罫子赤小あな平目の罫子
小あなまゝ十年のまゝ成遠く居る種の酒も目おあゝゝゝ
 一 蔵魂鬼の目武具の解鏡乃解蓮菜乃掃もね一武者ゝゝ
むち種乃解紅酒の罫もあゝゝゝ他皆治ゝゝ
 一 元旦諸社く代米曉ちあゝゝゝ付ゝゝ不接巻敷たを
魚ゝゝ
 一 大振ち手遠ひ舟並乃不給はゝゝゝ一魚のゝゝゝ
 一 方ゝゝ年あゝゝゝ来ゝゝゝも於書齋淨ち宜あゝ有罫子え
色ゝゝ親ゝゝねゝゝ
 一 奉り申ゝゝ仕取ゝゝ言無はゝゝ海も過ゝゝ色ゝゝ也ゝゝはゝゝ

目おあゝゝ隠家お魚ゝゝゝ一但ちえお用ゝゝ不並道ゝゝゝ
燗ゝゝゝち器も隠家の近き物ゝゝ治ゝゝゝ
 一 ちゝ家中ゝゝ法せゝゝ面鏡と鏡ゝゝ飾小あな音困をゝゝ外
常之ゝゝお片一ッ刀裁斗ゝゝ
 一 難ゆ近き法合切三日不隠ゝゝ
指目もゝゝもゝゝ結三ヶ年のち用ゝゝ名おゝゝ一破鏡せゝ
浦澄せゝゝゝゝ汚穢せゝゝは隠ゝゝゝ
 一 是般のゝゝね以粉練のゝゝを遠ゆのゝゝと以用ゝゝゝゝ一あよ
依ゝゝせゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
隠入信并部内信乃結形月未処月と来間志ゝゝ世比ゝゝ有

一 爵位を以て紳士に下を推しては徳を用ひし事人
 一 采章の事故に年始不流を履履初或はくは出たる
 一 好の時らたの五甲付了る事
 一 二の毛流事所ホ言事如事
 一 於る言はる刻限する事流事物の行
 一 一の毛流事所ホ言事如事
 一 於る言はる刻限する事流事物の行

嫡庶論

進之

寛政十年定興君嫡庶之義之節被

立置レタルナリ 我國家ニ於テ近來嫡庶ノ分
 陵遲セレテ全ク庶公子驕恣ニ失セラレレニ
 ハコレナケレバ花萼相輝ノ情誼厚ニ失トモ
 云ヘキナ也然ト雖氏往々斯成行氏ハ百年
 ノ後賢公子頃孫子ノニ生スヘキニモ有マレ
 ケレハ此義如何ト憂念セレニ各別ノ卓見ヲ
 以テ家國ノ全躰ヲ鑑ミラレ先達の上表アリ
 レヨリ衆儀一決テ般嫡庶ノ分ソレニ相定
 ラレ万世制度タナレテ家國ハタイレ浅カラ
 サレ忠節ナリ古今庶公子ノ其父兄ノ寵

ニ伐り煽惑分ヲ乱ルハ其例セカラス家國ノ大
患ヲ云置り然ニ今公子ノ身ニレテ此弊ヲ深ク
恐レラレ自身遜ノ建議セラレシテ載記ノ未
見サル所幾回モ感激ニ堪サレナリ此一輩ヲ
以賢公子ト称セシモ諛言ニハ有マレク既ニ
記録ニモ載レ上ハ國家万々世ニ残り往々ハ
他一モ傳聞セシメ大方ノ称歎ニコレアルヘキナ
リ斯高誼アルニハ一言申進ルニモ及サルナレ氏常
々言ヲ求メラル、未殊更兄弟ノ誼此上尙モ大
事ナリト鄙衷モ左ニ記シ此度賞ニ預ラレシ

祝言ニ申進ルナリ

孟子曰好名ノ人能讓千乘之國苟非其人簞食豆羹
見於色トアリ千乘之國トハ兵車千乘ヲ出ス諸侯ノ
國ヲ云千乗ノ富貴ヲ得ルハ誰トテモ欲願サル者
ナキハ人情ナレ氏修潔好名ノ人ハ情ヲ矯メ譽ヲ干
ムル心ヨリ此千乗之富貴モ見事辭讓スルナリ
然氏若實ニ天理ニ安レ富貴ヲ輕ニスル人ニナ
ケレハ得失ノ小ナル者ニ於テ反テ其真情ノ発
見スルヲ覺エス一簞ノ食一豆ノ羹ニ心動クナリ東
坡カ言ニ千金ノ璧ヲ破氏破釜ニ失セサルヲ能ス声

ト云レモ此意ナリ此度ノ一真情ニハ非ス好名ノ上ヨリ
出シカト疑惑ヲ懐クニハアラス凡ノ事一対大ナル
一ハナレ易ク行果サレモノナケレ氏日用機微ノ
間ニ却テ氣拔心ノ放ル、一多アルナリ碌々タルモノ
ニハ人モ怒レテ耳目ヲモ属セス高明ノ上ヨハ一言
一勤人必心ヲ注テ一善アレハ則チ褒レ不善アレハ謗テ
貶ス今斯ル建議アリテ美名人ノ口実トナル上ハ又
人ノ耳目ノ属スル一益甚レキ一ナリ人ヲ觀ニ其
勉ル所ニ於テセス其忽ニスル所ニ於テスレハ其安
シスル所ノ實ハ知ラレト云リ斯迄ノ上表アリレ

上ニ日用ノ間若其義ニタカヘル一アリテハ識者ノ誹
免レ難キ一ナリ嫡庶ノ分ト云ハ嫡ハ貴ク庶ハ卑
ト云一ヲ慥ニ知り心得ルカ其本実ニテ格式礼法ノ
一ハ其主意ヲ維持スル文飾ナリ恭敬ハ幣ノ未タ
將レサル者也ト云リ恭敬ハ威儀幣帛ニ因テ見ルナ
レ氏幣ノイマタ將レサル時己ニ此恭敬ノ心アル一ニ
テ幣帛ニ因テ後其心有ルニハ非ス其如ク嫡庶ノ
分モ格式礼法ニヨツテ分モ朋カナルニハアレト格式
礼法ノ前ニ此分アルヘキ事ニテ格式礼法ニ因テ此
分立ニハナキ一ナリ此義ヲ能熟思有テ日用幾微

車入りて又も車入りてさきさきとて勉むるを勉むるを勉むる
ついでに子路もあつて来りてわいさぬに子路もあつて
也るものさきさきとて勉むるを勉むるを勉むるを勉むる
曾子の二者は同じ事なり詩文の学もせむに古人の詩
又もすまぬとてさきさきとて勉むるを勉むるを勉むる
は道義の学も同じ事なり詩文の学もせむに古人の詩
一に五教もさきさきとて勉むるを勉むるを勉むるを勉むる
菜用と用く教氣を物とすは菜肉を物とすは用ひは少くは教
事を物とすは少くは一なりとて勉むるを勉むるを勉むる
教詩文乃ち学、菜肉少くは詩文の学も同じ事なり詩文の学もせむに古人の詩

と況文の力を載る少くは文不能なりとて道と求むるに
吾之は文と能書ふもの少くは己の志とて述極むるに
詩を性情とすは一なりもの少くは今古の人情世態詩を
わいさきとて道義とすは一なり詩の情も味も心も僅かに
心情とてさきさきとて勉むるを勉むるを勉むるを勉むる
の少くは所方とてさきさきとて勉むるを勉むるを勉むる
もくは只詩文の学も同じ事なり詩文の学もせむに古人の詩
肉の少くは用ひは少くは菜肉を物とすは用ひは少くは教
事を物とすは少くは一なりとて勉むるを勉むるを勉むる
小舟之は人々もさきさきとて勉むるを勉むるを勉むる

今訂文運以日月不磨不海之輩也... 此勢一
交立以彼人の子と書以後世も其書を讀み... 此事存自心
の以て立するも其願も其物成る中少くも人少くも是
皆能信するも其書く古人の中も其書くも其書くも其書く
流業も其書くも其書くも其書くも其書くも其書くも其書く
も其書くも其書くも其書くも其書くも其書くも其書くも其書く
の物も其書くも其書くも其書くも其書くも其書くも其書くも其書く
二運も其書くも其書くも其書くも其書くも其書くも其書くも其書く

寛政 庚申仲夏

善好篇

享和元年中前同君内藤家工部善子
成之節被進之

今度内藤家へ養レ玉フニ因テ平日提斯ニ成ヘキヲ申
進ス一キ旨兼知イタレ候諸先生ノ教諭受ラレ
候上猶又言ヲ請レ候趣善ヲ好メルノ厚感入夕
ル事ニ候固リ淺見寡聞緊要ノ心付モナク残念
ノ至リニ候雖然一言ヲ贈リ申進セザルモ又
不本意ニ候間尋常ノ言左ニ記レ申候古聖
人ノ五倫ノ道ヲ立ラレ候ハ則五教ニテ候故ニ
此道ヲ学得テ行正ク徳修リ候ハ天地ノ間ニ

立テ何国一往トモ間違ハ無之トニテ候父子ノ
間ハ親君臣ノ間ハ義夫婦ノ別長幼ノ間ハ序
間友ノ間ハ信ニテ候此親義別序信ニテ天
下之父子君臣夫婦長幼朋友ノ道ハ明サレ
ニテ候此親義別序信ヲ外ニシテ父子君臣夫
婦長幼朋友ニ處スヘキ道ハ無之候世ニ和睦セサ
ル父子有之和合セサル君臣有之和諧セサル夫
婦有之和順セサル長幼有之輕薄ナル朋友有之
候此間ニ處セントテハ種々ニ思フ勞シ慮ヲ苦シメ
候是親義別序信ヲ實ニ會得シ行得ヌニテ候然

ヲ其本ヲ捨テ末ニ趨ク私智ヲ以テ慮シ得レト思フ勞
シ慮ヲ苦シテ候トハ僭ニアラスンハ妄ナルトニテ候唯
旦暮我行ヲ顧ミ我徳ヲ修テ此親義別序信ニ
心ヲ用ヒイカナル是親イカナル是義イカナル是
別イカナル是序イカナル是信ト工夫修行シ此
親義別序信ヲ真實ニ心ニ會得シ身ニ行得
ルトキハ如何ナル父子モ和睦シ如何ナル君臣
モ和合シイカナル夫婦モ和諧シイカナル長
幼ニモ和順シイカナル朋友モ厚誼ニ感スル
トニテ候此親義別序信モテ家族輯睦スルヲ家

ノ齊トハ去ヘク侯出府レ玉ヒシ以来勤学ハレ侯モ此
事今日ノ急務モ只此事ニツソ有ヘク侯

顔淵ノ孔子ニ何ヲ以為身ト問レシニ恭敬忠信而已ト
答給イ恭ナレハ患ニ遠リ敬ナレハ衆ニ和レ信ナレハ人
任レ斯四ノ者ヲ勤レハ国ヲモ正スヘク豈特一身ノ
ニナランヤト仰ラレ樊遲ノ仁ヲ問レニ居處恭執事
敬与人忠ト答給ヒ子張行ヲ問レニ言忠信行篤敬
ト答給ヒ侯孔門ノ諸弟子ノ聖師ヘ益ヲ請レ侯上ニ
ハ各別ナル教誨モ有ヘキトノヤウニ思レ侯凡只恭敬
忠信ノ四モテ侯是ヲ以テ見レハ行ヲ正レ徳ヲ修メ

天地ノ間ニ立トハ此恭敬忠信ノ外ニ出サルト明テ侯
然レハ今日ノ行ヲ正レ徳ヲ修侯ニハ此恭敬已ヲ盡
イカナル是忠物ニ接スルイカナル是信ト工夫修業ノ
此恭敬忠信ヲ眞実ニ心ニ會得レ身ニ行得ル時ハイ
ツクヘ往侯トモ身ハ處レ得ルトニテ侯此恭敬忠
信モテ身ヲトリキメ我物トナリタルヲ行ノニシク
徳ノ修リタルト云ヘク侯是則出府レ玉ヒシ以来勤
学レ侯モ此事今日ノ急務モ唯此事ニツソ有ヘク
侯一其日用ノ事々ハ皆此根本ヨリ出タル枝葉ノ
ニ用ヒテハ假令見事ニ有之トモ本根ノ培養

厚カラサレハ保チカタク源ナキ泉ノ如ク忽酒濁ル
トニテ侯今愚老力足下ニ望所ハ唯此恭敬忠信ヲ
以テ徳ヲ修ラレ親義別序信ヲ以テ家ヲ齊レ侯
ニテ侯是ヲ能ク研精勉勵シ玉ハ、室家和睦シ美名
モ立玉ハシト疑ナク侯嗚呼各天涯千里再會由ナ
ク侯書ハ言ヲ益サス言ハ意ヲ益サ、ルニテ侯トモ
聊鄙懐ヲ一冊ニ著シ錢ニ贈進シ侯愚老力事ヲ
思ヒ出シ玉フアラハ此冊子ヲ愚老ト披覽シ玉ヒ
万分之一益ヲモ得ラレ侯ハ本懐何カコレニ過ヘク
侯當家ハ世ニモ人ニモ知ラレタル家柄ナレハ此賢
家名ヲ汚シ玉ハルマレク侯不恙

百里篇

享和三年 齊宣公御痲疹の節
迎習の賜之

百里と云ふ者、その中甲戌年、不恙と云ふ、此、戒め、或る、此、也、の
始、ハ、侯、も、思、は、し、と、抱、き、し、也、用、也、相、お、し、く、も、中、を、し、未、
お、し、り、ゆ、く、事、ハ、ゆ、き、み、ハ、事、ハ、ゆ、き、み、ハ、事、ハ、ゆ、き、み、ハ、事、
始、ハ、侯、を、し、り、思、懼、一、半、ハ、あ、ら、う、と、し、也、奇、を、し、事、ハ、思、
収、漫、し、り、し、侯、ハ、安、心、乃、事、ハ、し、り、侯、ハ、思、懼、一、半、ハ、あ、ら、う、
め、し、事、ハ、思、懼、一、半、ハ、あ、ら、う、と、し、也、奇、を、し、事、ハ、思、
以後、の、事、ハ、表、病、の、事、ハ、思、懼、一、半、ハ、あ、ら、う、と、し、也、奇、を、し、事、ハ、思、

く用ゐらるゝ其他の乃とてゆゑに近く極向の事れ純姫

彈正殿に事々しく言ふに際し秋等々孝義に及ぶと感賞

とて事々言ふに及ぶと感賞とて感賞とて感賞とて感賞

とて感賞とて感賞とて感賞とて感賞とて感賞とて感賞

とて感賞とて感賞とて感賞とて感賞とて感賞とて感賞

とて感賞とて感賞とて感賞とて感賞とて感賞とて感賞

とて感賞とて感賞とて感賞とて感賞とて感賞とて感賞

とて感賞とて感賞とて感賞とて感賞とて感賞とて感賞

とて感賞とて感賞とて感賞とて感賞とて感賞とて感賞

とて感賞とて感賞とて感賞とて感賞とて感賞とて感賞

とて感賞とて感賞とて感賞とて感賞とて感賞とて感賞

とて感賞とて感賞とて感賞とて感賞とて感賞とて感賞

とて感賞とて感賞とて感賞とて感賞とて感賞とて感賞

とて感賞とて感賞とて感賞とて感賞とて感賞とて感賞

とて感賞とて感賞とて感賞とて感賞とて感賞とて感賞

とて感賞とて感賞とて感賞とて感賞とて感賞とて感賞

とて感賞とて感賞とて感賞とて感賞とて感賞とて感賞

とて感賞とて感賞とて感賞とて感賞とて感賞とて感賞

とて感賞とて感賞とて感賞とて感賞とて感賞とて感賞

とて感賞とて感賞とて感賞とて感賞とて感賞とて感賞

とて感賞とて感賞とて感賞とて感賞とて感賞とて感賞

とて感賞とて感賞とて感賞とて感賞とて感賞とて感賞

とて感賞とて感賞とて感賞とて感賞とて感賞とて感賞

とて感賞とて感賞とて感賞とて感賞とて感賞とて感賞

とて感賞とて感賞とて感賞とて感賞とて感賞とて感賞

とて感賞とて感賞とて感賞とて感賞とて感賞とて感賞

とて感賞とて感賞とて感賞とて感賞とて感賞とて感賞

とて感賞とて感賞とて感賞とて感賞とて感賞とて感賞

文不むくまは是と能くも成せしむる可き事旅をせ
しむるは談ハ別を成せしむるは教を成しむるは
徳を成しむるは徳を成しむるは徳を成しむるは
徳を成しむるは徳を成しむるは徳を成しむるは

一 け表向の事ハ彈ハの教示有別と教示後ハ竹葉成也
とせしむるは徳を成しむるは徳を成しむるは
徳を成しむるは徳を成しむるは徳を成しむるは
徳を成しむるは徳を成しむるは徳を成しむるは
徳を成しむるは徳を成しむるは徳を成しむるは

とも思はざる事人情少く申の竹葉成也とせしむるは
徳を成しむるは徳を成しむるは徳を成しむるは
徳を成しむるは徳を成しむるは徳を成しむるは
徳を成しむるは徳を成しむるは徳を成しむるは
徳を成しむるは徳を成しむるは徳を成しむるは
徳を成しむるは徳を成しむるは徳を成しむるは

毎ふしゆに 武部殿と河民とをくく 教く 進歩の河民と
ありしやせしむにけ 河民も又武部ニ夕方と云ふ 母
載らん約と樂と云ふ又武部と云ふはこれ... 母のあふはる
を回らうしゆの銀鏡と物にあらはる

一 河代くく 奥向と云ふ他くく 入響りく 世の習俗は武部家と
武部小移ッ事あるも武部は武部又區く武部 武部事
は因ふ生れ知れ武部く 武部人小云ふにけ 武部の習俗は武部の
は武部く武部く 武部武部武部武部武部武部武部武部武部
さくく 武部武部 武部武部武部武部武部武部武部武部武部
と云ふ 武部武部武部武部武部武部武部武部武部武部武部

武部武部 武部武部武部武部武部武部武部武部武部武部武部
武部武部武部武部武部武部武部武部武部武部武部武部武部
武部武部武部武部武部武部武部武部武部武部武部武部武部
武部武部武部武部武部武部武部武部武部武部武部武部武部

武部武部

武部武部武部武部武部武部武部武部武部武部武部武部武部
武部武部武部武部武部武部武部武部武部武部武部武部武部

南亭餘韻卷之三 終



